

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化史

<史料館だより>

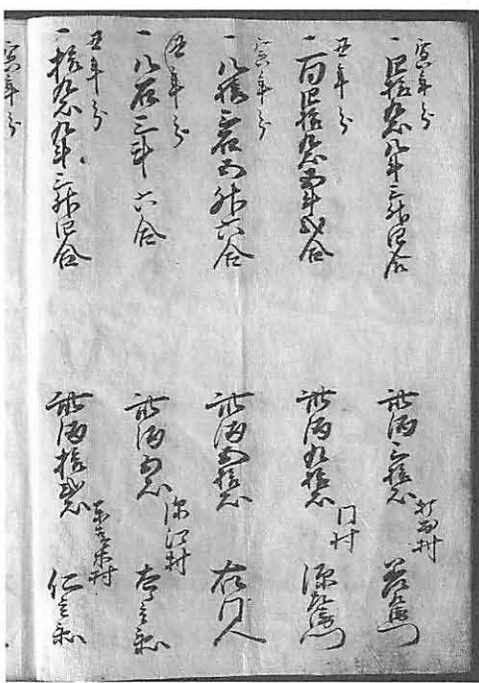
目次

- ◇展示品との対話 (九)
 - 史料館所蔵の「ミニだんじり」について……………木村清弘 2
- ◇史料館入館者四万人突破…………… 5
- ◇史料に読む深江の歴史 (六)
 - 江戸積みと地元消費の酒産地……………大国正美 6
- ◇史料館日誌抄……………道谷 卓 8

1998.10.10
NO.24

「元禄十丑年より酒造米高人別帳」▶
(本誌6P参照)

深江村太郎兵衛、東青木村仁兵衛など、江戸時代前期の酒造家が並ぶ。
深江村太郎兵衛は、元禄10年には8石3斗6合の酒米を用いて酒5石を作っていた。後の灘五郷の発展からすると、極めて零細な規模である。



神戸深江生活文化史料館

展示品との対話(九)

史料館所蔵の
ミニだんじりについて

神大附属住吉小学校教諭 木村清弘

一、だんじりとミニだんじり

だんじりの由来については、様々な説がありますが、元来、農作物の豊作祈願や収穫物への神の感謝を示していたものが、経済的に豊かになるにつれ、祭りの風流(ふりゆう)として、みんなで楽しむもの、言い換えるならば娯楽の中心として年々華美に豪華になってきたものと考えられています。

神戸・芦屋の場合は、播州・淡路の屋台文化の影響も受け、彫物だけでなく、幕にもお金をかけ、「彫物でみせる・幕でみせる」だんじりで、彫物二辺倒の岸和田や大阪のだんじりとは一風趣がかわっています(但し同じ大阪でも淀川以西の地区は、「幕でもみせる」だんじりです)。

さて、ミニだんじりですが、これは、だんじり好きの人が、趣味が高じて、自分の家に飾ったり、子どもにひかせたりする為に作ったもので、神戸市内でも多く見かけます。

よく知られたところでは、高嶋良平氏(東明地区)が御影幼稚園に寄贈した孫だんじり、可児均氏(田中區)や上田政雄氏(西之町)、大植義広氏(東之町)、広岡俊司氏(山田區)等各氏製作のミニだんじりなどが有名です。

オリジナルのミニだんじりもありますが、本物のだんじりを縮尺して作ったミニだんじりがほとんどです。

二、本ミニだんじりの特徴

下の写真をじっくり御覧下さい。だんじり好きな方なら、「おや、

このミニだんじり、少し変わっているな？」とお気づきでしょうか。どこが変わっているのでしょうか。結論から言いますと、このだんじりには大阪型のだんじりと神戸型のだんじりが一つのだんじりの中で混じりあっているのです。言い換えるなら、大阪型と神戸型が折衷されただんじりであるということです。

神戸型の特徴として、

①外ゴマである

②屋根が神戸型(男屋根「前屋根」が長い)

大阪型の特徴として、

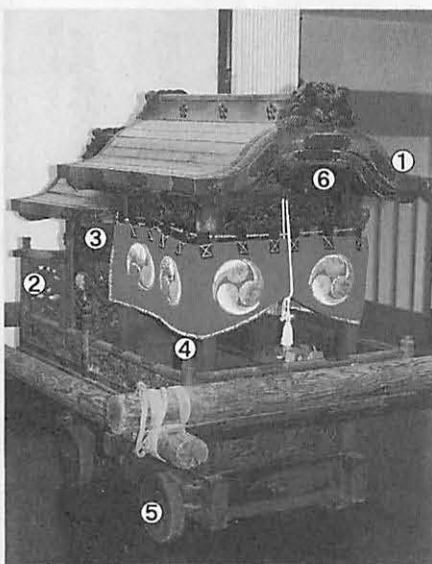
①後三枚板(前は幕ですが、後ろは幕の代わりに彫刻の入った板で囲われています)

②擬宝珠高欄である

ことが、それぞれあげられます。

(ただし神戸型の特徴の②については、諸説あり、特に神戸型の特徴としない人もいます)

屋根の破風の形状から見ると、大阪城の東堀(城東区・鶴見区)にあるだんじりとよく似ています(神戸の場合は、破風の両端がややそりぎみです)。



史料館蔵のミニだんじり

※三つ巴の幕は後でつけたもの。元の幕は梅鉢の紋です

- | | |
|-------------|------------------|
| ① 破風(はぶ・はふ) | ④ 擬宝珠高欄(ぎぼしこうらん) |
| ② 三枚板 | ⑤ 外ゴマ |
| ③ 三枚板 | ⑥ 押懸魚 |

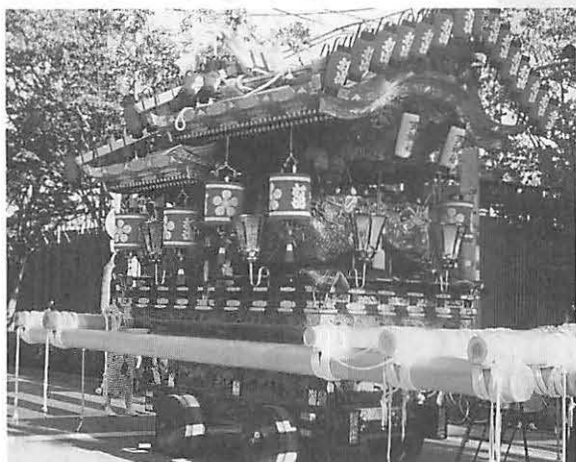
外ゴマは、その状態から、このだんじりが作られた当初のものであることを示しており、「まず大阪型のだんじりを作って、それを後に外ゴマにして神戸型に改造した」ものではなく、当初から「外ゴマ、後三枚板であった」ことが分かります。

このだんじりは大阪天満宮より地元の中尾実氏が譲り受け震災後、史料館へ寄贈されたものです。

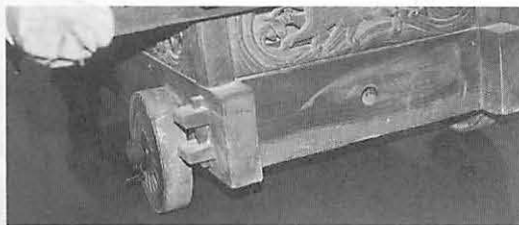
事実、だんじりに取り付けられている金具や元の前幕に縫いつけられている神紋は梅鉢であり、天満宮のものには間違いないのですが、このだんじりを作るにあたっては、芦屋の打出天神社のだんじりも参考に行っていると考えられます。

即ち、大阪の天満宮のだんじり（大阪型・文久元年「一八六一」新調）と芦屋の打出天神社のだんじり（神戸型・昭和九年新調）との二台のだんじりを模して作られたミニだんじりなのです。

事実、同じ天神さんということ、かつて



史料館蔵ミニだんじりのモデルとなった打出地車

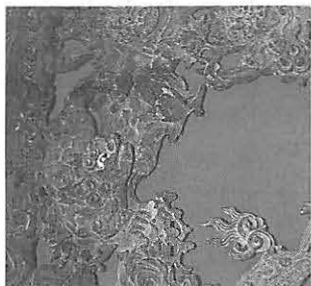


外ゴマ
鉄輪でできおり、さび具合等から製作当時からあった外ゴマと思われる



◀打出地車 牡丹に唐獅子

史料館蔵 牡丹に唐獅子▶



◀天満宮地車 親子唐獅子

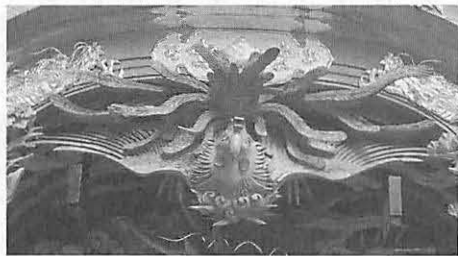
打出のだんじりが、大阪の天満宮まで行ったという言い伝えがあります。そして木の枯れ具合からして、作られた時期は昭和十年頃と考えられます。

三、彫物と大きさ

彫物は、中国の四獣神の思想から来た朱雀や、瑞鳥（めでたい鳥）である鶴以外は「牡丹に唐獅子」であり、天満宮のだんじりにも、打出のだんじりにもよく使われている図柄です。ちなみに、「牡丹に唐獅子」はポピュラーな彫物であり、それぞれ「花と動物の王」を示しており、めでたい図柄とされています。

男屋根の鬼板の下にある拝懸魚（おがみげぎよ）の朱雀は、真つ直ぐ前を向いており、打出の朱雀そっくりです。数多くあるだんじりのうち、朱雀が真つ直ぐ前を向いているのは、打出と西区（住吉）のだんじり位なもので、これは平等院鳳凰堂の襖の絵をまねて彫つたものと言われています。

これらの彫物の多くは透かし彫りであり、浮き彫りとは違い、それだけ手間暇がかかっています。ひよっとするとこの彫刻のところだけは、本職の彫師に頼んだのかもしれない。



▲打出地車 朱雀

▼史料館蔵 朱雀？



このだんじりの大きさは、長さ約一・二m、幅約〇・九m、高さ約〇・九mで、本物のだんじりの約1/5の大きさで（幅だけは約1/3）、子どもであれば屋根に乗れ、また実際にひいて動かすこともできます。

三枚板の後ろにある部（しとみ）は、ふつうのだんじりにはないもので、通常は脇障子といって、だんじりの真ん中の脇あたりに彫物が彫られているのがふつうですが、このだんじりの場合、そこに擬宝珠高欄があるため、後ろに持ってきたものと考えられます。

四、終わりに

神戸・芦屋地区には四十五台近いだんじりがあり、祭り近くになるとあちこちからだんじり囃子が聞こえ、「祭り」という雰囲気自然と盛り上げます。だんじり囃子を聞くと「血が騒ぐ」という人は結構多く、こうした人たちの熱が高じて、ミニだんじりの製作になる場合がほとんどです。

このだんじりも、だんじり好きの人が、趣味の延長として作ったものと思われます。

ミニだんじりを作るには、だんじりの構造を知らなければ作れません、ある程度物作りが好きな人や建築に腕の覚えのある人ならそう難しいものではありません。

最後にミニ（ミニミニ）だんじりの見れる場所をお知らせします。こうしたミニだんじりもだんじり文化の一つととらえると、だんじりが持つ多様な面が見えてきます。

- ①青木文化センター（小学生の手作り）
- ②本山パレード・可児氏地車（田中地車の後をついていきます）
- ③西町会館・上田氏地車（祭りの日に会館に飾ってあります・もつと立派な地車は寄贈した幼稚園で震災により全壊・残念！）
そして、

④ 当、神戸深江生活文化史料館

本物のだんじりは、年に一回、祭りの時にだけ蔵から出され、それこそ日の目をみます。それに対してミニだんじりは、年中見ることがができます。

あなたも一度ミニだんじりを作ってみませんか？。



「来館者四万人目の証」が大国副館長より手渡される

一九九八年二月二十日（金）に、一九八二年二月二十日開館以来、四万人を突破しました。四万人目の入館者となったのは、神戸市立住吉小学校三年生のみなさん（二一七名）で、大国副館長より「来館者四万人目の証」と記念品を贈らせていただきました。

史料館の入館者 四万人突破！



住吉小学校三年生のみなさん



史料に読む深江の歴史(六)

江戸積みと地元消費の酒産地

史料館副館長 大 国 正 美

江戸時代の酒造りの第一のピークは、周知のように元禄年間(一六八八―一七〇四)に訪れた。これに対し、幕府は米価に大きな影響を与える酒造業の実態の把握と、酒運上金の賦課を目的に、元禄十年(一六八七)の株改めを行った。当時の灘地方は、灘五郷の名称はまだ生まれておらず、今津郷(武庫郡)、上灘郷(菟原郡)、下灘郷(八部郡)だけの灘三郷と呼ばれていた。明治四十年に発行された『灘酒沿革史』は、元禄十年と同十一年分の酒造米高の調査として、灘三郷の酒造家と酒造米高・酒造石高を紹介している。この二年間では酒造米高に変動がある。しかしこれまでの研究は、この変動について注意を払って来なかった。また『灘酒沿革史』やこれを踏襲した『新修神戸市史』は元禄十二年に尼崎藩が調査したものである。尼崎藩が独自に酒造米高の調査をしたとすれば、注目されるべきことだが、『灘酒沿革史』の記述の真偽や調査したとすればその目的はこれまで検討されてこなかった。

この度史料館で、明治四年(一八七二)の写しながら「元禄十一年より酒造米高人別覚」と題する史料を購入し展示した。この史料を通じて、新たな事実も浮かんで来た。改めて、江戸積み産地と地元消費の産地の地域分担について考えたい。

この史料は大きく分けると、①元禄十年と十一年の酒造米高と酒造高について、灘五郷の酒造家一人ずつの書き上げ、②元禄十一年

から正徳五年(一七二五)までの酒造統制、③某酒造家の寛文六年(一六六七)、延宝七年(一六七九)、元禄十年、正徳五年の造り石株高覚一という三部からなっている。そして末尾に「右は古キ書物故紙虫つゞりわかりがたく候二付、明治四末二月相改写 山本藤兵衛」という注書きがある。正徳五年は「元禄十年之定数の三分の一造り」の減釀令が出た年である。これ以降、幕府の年貢増徴策や農業技術の向上によって、市場に出回る米の量が増え、米価が低落。幕府は一転して酒造を奨励した。飢饉となる天明六年(一七八六)まで減釀令は発令されず、この間に新興酒造業地帯である灘地方は大きく発展した。この史料はいわば灘地方発展前夜の酒造統制の状況を記録したものととして、保存されてきたに違いない。

さて①の部分をもとめたものが表である。史料には酒造米高とそれによって醸造された酒造高の両方が書かれているが、酒造米高の方が実数で、酒造高は「白米百石二付酒六十石有積也」とあって酒造米高一〇〇石に六〇石が醸造されたという予想高であり、酒造米高の方を抽出した。単位は石とした。表をみれば、すでに指摘されているように、魚崎の十兵衛が突出しているほかは規模が小さい。

元禄10年と同11年の酒造米高と減少率

地区	酒造家	元禄10	元禄11	比
今津	吉兵衛	31.562	23.256	74
	善左衛門	24.917	24.917	100
打出	善次郎	21.595	21.595	100
	善左衛門	74.751	49.834	67
芦屋	源左衛門	149.502	83.056	56
	次右衛門	29.900	29.900	100
三深	利太郎	21.595	16.101	75
	太兵衛	8.306	—	—
東青木	仁兵衛	19.934	17.442	88
	九左衛門	—	8.306	—
小島	善次郎	581.396	498.339	86
	善左衛門	未詳	116.279	—
住吉	弥次郎	166.113	166.113	100
	五郎左衛門	112.957	36.213	32
川原	伊左衛門	49.834	40.365	81
	孫左衛門	24.917	11.628	47
原田	三郎左衛門	19.934	11.628	58
	善次郎	24.917	未詳	—
神戸	喜左衛門	33.223	18.272	55
	善太郎	46.512	22.425	48
同	善右衛門	5.814	3.654	63
	善次郎	46.512	21.595	46
二茶屋	善兵衛	19.934	3.322	17
	善三右衛門	41.528	13.289	32
同	善三右衛門	19.934	3.322	17
	伊左衛門	33.223	—	—

(単位は元禄10年・同11年が石、減少比が%)

また上灘郷の規模がもつとも大きい。

①の書き上げに続いて、以下の注釈がある。

此酒を有石高、銘々御願申上造申本高也、又丑年分寅年分と言ふハ、午ノ四月十七日ニ尼崎御勘定所ニおゐて御領分酒屋庄屋共不残判形被 仰付、則此時丑年分寅年分御帳面式冊ニ致、判形差上申候

すなわち、元禄十年分と十一年分を、午ノ年ニ元禄十五年四月に藩勘定所に、二冊の帳簿で提出したという。直前の三月に、酒造米の数量について「御料は御代官、町方ハ其所之奉行入、私領は地頭より領分限り」「丑年寅年両年分年限ニ書付、可被差出候」(「御触書寛保集成」二一五三号)という酒造米高調査の触が出されており、幕府の指示に従ったものであることは明らかである。当時の灘酒造業に関する年代記「尼ヶ崎大部屋日記之写し」(白嘉納家文書、関西学院大学図書館蔵)にも元禄十二年の尼崎藩調査の記載はなく、この解釈を補強する。元禄十二年に尼崎藩が独自に酒造米高を調査したとする「灘酒沿革史」の記述は誤りであろう。

さらに興味深いのは元禄十年と十一年の両方を提出させた背景についてである。史料は次のように続けている。

是ハ丑年御法度之御触有之以前、少シ宛新酒仕候也、又寅年ハ御法度故何方とも新酒無之、夫故丑年新酒仕候者ハ寅年造高と少宛相違有、又新酒不仕者ハ兩年共石高同前也、此新酒と申

□ハ御運上御免し被下候

すなわち、元禄十年に禁止されるまでは、少しずつ新酒を作っており、元禄十一年は禁止されたのでどこでも新酒は作らず、元禄十年に新酒を造った者は、元禄十一年の造高が減少し、新酒を造っていないかっただけのものと同じ高になったのである。二年間の酒造米高の差は新酒醸造の差だとする。ここでいう新酒とは、彼岸酒とも

いい八月ごろから作る酒をさす。酒は時期によって新酒、間酒、寒前酒、寒酒があり(「日本山海名産図会」)、寒酒は寒い季節に仕込まれるため期間はかかるが品質がよく、二月ごろに出荷される。これに対し新酒は残暑の厳しい時から仕込まれ、「当座売」「当座造」とも記載され、醸造後直ちに販売される。幕府は良質な寒酒に一本化することを狙って、寛文十年(一六七〇)に新酒を禁止して以降、同十一年、十二年、十三年ニ延宝元年、同二年、三年、八年(一六八〇)、九年ニ天和元年、貞享五年(一六八八)としばしば新酒禁止令を出した。しかし新酒造りは止まらなかった。

ただ深江の太郎兵衛の場合は、元禄十年分しか記載がない。この史料の注釈をそのまま受け取れば、元禄十年はすべて新酒の醸造高だったことになるが、十一年は別の理由で醸造しなかったことも考えられる。従って、一方の年の記載のない酒造家は除いて比率をしてみると、大まかな傾向として今津郷、上灘郷、下灘郷の順番で、すなわち西にいくほど、元禄十一年の酒造高の減少率が大きく、新酒の比率が高いことが推定される。神戸・二茶屋村では伊左衛門を除いた元禄十年の酒造米高は二一三石余に対し、元禄十一年は八五石余ではほぼ四割に落ち込んでいる。六割が新酒ということになる。兵庫津の元禄十年の新酒米高は四八〇石余りで、寒酒米高は三〇五

四石もあり(「新修神戸市史」歴史編Ⅲ 近世、一七七頁)、醸造高全体に占める新酒率は二三%だから、六割という比率は異常に高い。

この理由は何だろうか。「当座売」の新酒には即売の消費地が必要である。また新酒は幕府が禁止したが、伊丹では近世後期になっても造られた。端境期に出荷するため、需要が高かったのである。兵庫津が寒造り酒にウエイトをおいていたのに対し、その直近の神戸・二茶屋村は、兵庫津であまり造られない新酒に重点を置いたのである。兵庫津という消費地に近かったことも要因だろう。

史料館日誌抄

史料館研究員 道谷 卓

平成十年一月以降

△平成十年▽

- 1月9日 本庄小学校 三年生(見学者 一六三名)
- 1月23日 魚崎小学校 三年生(見学者 一五六名)
- 1月30日 こうべ小学校 三年生(見学者 八十名)
- 六甲アイランド小学校 三年生(見学者 一二二名)
- 1月31日 本山南小学校 三年生(見学者 八十一名)
- 2月6日 本山第三小学校 三年生(見学者 一〇〇名)
- 東灘小学校 三年生(見学者 九十九名)
- 2月7日 福池小学校 三年生(見学者 七十八名)
- 2月10日 御影北小学校 三年生(見学者 一一四名)
- 2月13日 本山第一小学校 三年生(見学者 一二四名)
- 2月20日 西灘小学校 三年生(見学者 四十八名)
- 東灘小学校 三年生(見学者 五十六名)
- 住吉小学校 三年生(見学者 一一七名)
- ⇨入館者四万人突破
- 4月19日 阪神電鉄 '98阪神沿線漫步(見学者 四〇〇名)
- 5月14日 西宮文化協会(見学者 二十八名)
- 6月17日 東灘区役所新規採用職員研修(見学者 三十七名)

子供用パンフレットを改訂しました。

この度、子供用パンフレットを改訂し、「まちとくらしのれきし」のタイトルで発行、今年1月からの小学校団体見学より配布を始めました。フルカラー、8ページでたくさんの写真を掲載し、非常に見やすい内容となっています。



編集後記

今回はじめて、「史料館だより」の編集をすることになりました。今後ともよろしくお願いいたします。

今号では、久々に「展示品との対話」や「史料にみる深江の歴史」のコーナーを取り上げてみました。いずれの資料も館内に展示中ですのでじっくりご覧下さい。

「史料館所蔵のミニだんじり」を書かれた木村先生は、このたび「だんじりが百倍楽しめる本」を出版されました。東灘区のだんじりの歴史がわかる貴重な著書です。ご希望の方は史料館でも販売しております(一冊・四五〇〇円)のでお求め下さい。(T・M)

「生活文化史」 第24号 98・10・10

編集/道谷 卓

発行/神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17

☎ 078-453-4980 (FAX兼用)